

美松里洞窟出土の無文土器：西部朝鮮無文土器編年のために（二）

西谷，正

<https://doi.org/10.15017/2235197>

出版情報：史淵. 115, pp.165-183, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

美松里洞窟出土の無文土器

— 西部朝鮮無文土器編年のために (二) —

西 谷 正

一、はじめに

土器の材料たる粘土は年處を経るも消滅すること無く、金属大理石等の如く、他に之を利用する便殆ど無きを以て、土器は其の完全なるもの及び、破片の状態に於いて、今日に遺存する分量最も多し。また其の形状の多様にして、変化の急激なることは、考古学的資料として最も価値ある所以にして、人種と時代とによりて、其の形状、紋様、製作等を異にするを以て、之によりて土器其者及び伴出遺物の年代人種等を推定するの屈強なる資料をなす

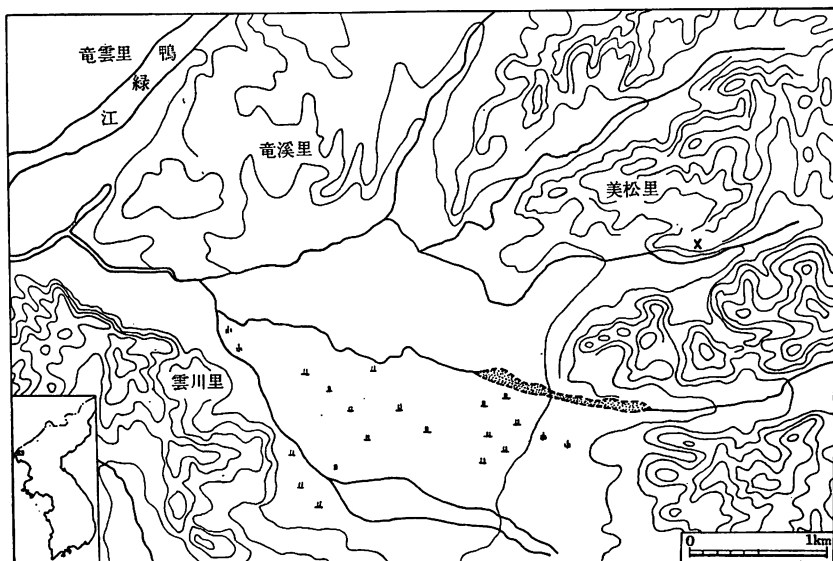
右の言葉は、考古学における土器の重要性を述べた浜田耕作^①の弁である。朝鮮半島における考古学研究は、一九四五年以後めざましい成果をあげつつあるが、原始時代の櫛目文土器から中・近世の陶磁器にいたるまでの、土器・陶器・磁器の編年研究は、まだ確立していない。私は、たまたま無文土器を手はじめとして、その作業に着手している。ここで取り上げようとする美松里洞窟出土の無文土器も、そうした研究の一環をなすものである。次節以下で述べるように、美松里出土無文土器を分析したところ、二型式に細分が可能になった。こうした作業の積み重ねが、西

部朝鮮無文土器編年研究の基礎になるのである。

二、美松里洞窟遺跡の位置と調査の経過

平安北道義州郡美松里にある美松里洞窟遺跡は、中国との国境をなす鴨緑江下流域の左岸にあって、同郡義州邑の所在地から東北方に一〇キロ余りのところにある。その付近で、そう高くない山と丘の間には美松里の集落がある。美松里集落の東南方には頂上部の標高七七・七メートルの丘陵があつて、その山腹の傾斜面はほぼ東西方向に長く広がっている。この丘陵は石灰岩層からなるが、その西南の傾斜面には、大小の岩の割け目がいくつかみられる。そのなかで傾斜面の西南中腹の西壁に開いた洞窟はもっとも大きいものである。

遺跡は、まさにその石灰岩洞窟にあたる。洞窟の南側には、三〇メートルの間隔をおいて漢川という小さい小川があり、東から西へと流れる。この漢川は、西方約七キロの地点で鴨緑江に合流している。このように、美松里遺跡は、鴨緑江からそう遠くないところ



第1図 美松里洞窟遺跡の位置

にあり、周囲には小山とゆるやかな傾斜地が連続する（第一図）。この付近の石灰岩地帯は、古くから石灰石採取地であった。遺跡地は、一九四五年まで、義州郡水鎮面松村洞南谷ヘツカメという地名で呼ばれた。その当時、ちょうどそこに石灰を焼くための石灰窯が設置されていたことから、そのような地名が起ったものである。

さて、美松里遺跡は一九四五年以後、人民経済復旧のための建設がめざましく展開していた一九五四年五月に発見された。そのころ、石灰石採掘工事で岩壁が爆破されたとき、洞窟の西側入口部分が開口し、その内部から、石鏃・石錘・人骨・小獣骨などが出土したのである。洞窟入口が土砂で充満していたため、爆破前には、そこが洞窟の入口であることはわからなかったといわれる。遺物発見の通報は、ただちに新義州歴史博物館にもたらされたので、博物館では現地を踏査して、洞窟遺跡であることを確認するとともに、保存対策を講じるべく、その方が模索された。その後、一九五九年三月になって、義州郡営石灰工場で溶鉱炉を建設するため、洞窟入口の南側で粘土を採取したところ、種属不明の獣骨や土器片などを発見した。通報を受けた新義州歴史博物館では現地を踏査した。その結果、一九五四年に発見した地点の反対側に、もう一つの洞窟入口のあることを確認した。そこで、そのような通報を得た科学院考古学及民俗学研究所では、ただちに発掘隊を組織して、調査に着手したのである。これには新義州歴史博物館の館員も参加した。

三、発掘前の洞窟の状況

洞窟は、その南側入口の底面が漢川支流の小川の底から約一六メートルの高さにあり、そこでの天井までの高さは約二メートルである。この付近が昔から石灰石の採取場であったので、洞窟の入口部分は破壊をひどく受け、洞窟内には粘土がひじょうに厚く堆積していた。したがって、洞窟の南側にある現在の入口の高さが二メートルというのは、そのような堆積土があるため低いのであって、埋まる前には天井がもっと高かったことは当然である。底面は広

いが、上にいくほど狭まる。また、発掘前までの南側入口は、一人がようやく出入りすることができるほどの大きさに開口していた。

ところで、遺物包含層は、現在、洞窟の入口となっている地点から外に、すなわち、南方に約三〜四メートルの地点からはじまる。このことは、現在、露天状態にある洞窟入口前面の一定面積が、石灰石採取以前までは洞窟内部であったことを示す。それゆえに、入口はもっと外(南)にあったが、かつて南側入口天井部の大部分が崩落して、ここにちみりするような状態になったと推測される。

上述のように、洞窟の入口は西側にもあった。外観上そこは、南側の入口と隣り合わせになった二つの洞窟であるかのようにみえる。西側に入口のある洞窟は、東方に向けて奥まっているが、すでに天井部はなくなり、遺物包含層が露天状態にあった。もともと洞窟の底部をなした岩盤の上に土砂が厚く堆積している関係で、発掘前の地表では、南側入口との間に介在する岩盤のため、西側に入口をもつ洞窟の東側部分がふさがった独立的な洞窟であるかのようにみうけられた。しかし、発掘が進むにつれて、そこが南側に入口をもつ洞窟と合わさって、一つの洞窟に通じるものであることがわかった。

現在、南側入口から北側に向って長く伸びる主要な洞窟と、さらに、内に東側に開けられた脇の洞窟とからなる。鍾乳石などが垂れた脇の洞窟は狭くて一人一人がようやく出入りできるほどである。また、奥行も短かく二メートルを越えない。洞窟内は、入口から奥に進むにつれて、しだいに底面が高くなるように粘土が堆積していた。そして、現在の入口から一五メートルほど内部に入ると、その粘土が洞窟の天井に突きあたってしまう(第二図)。このような土砂の堆積状況は、すでに古く洞窟天井部にヒビもしくは穴があいて、そこから土砂が流れこみ洞窟内を埋めたことが推測された。そのため、洞窟の内から外へと傾斜が強く、発掘前の文化層南端と、現在窟がふさがっている窟内北端における現地表の高低差は四メートル以上を測る。

四、地層と遺物の出土状況

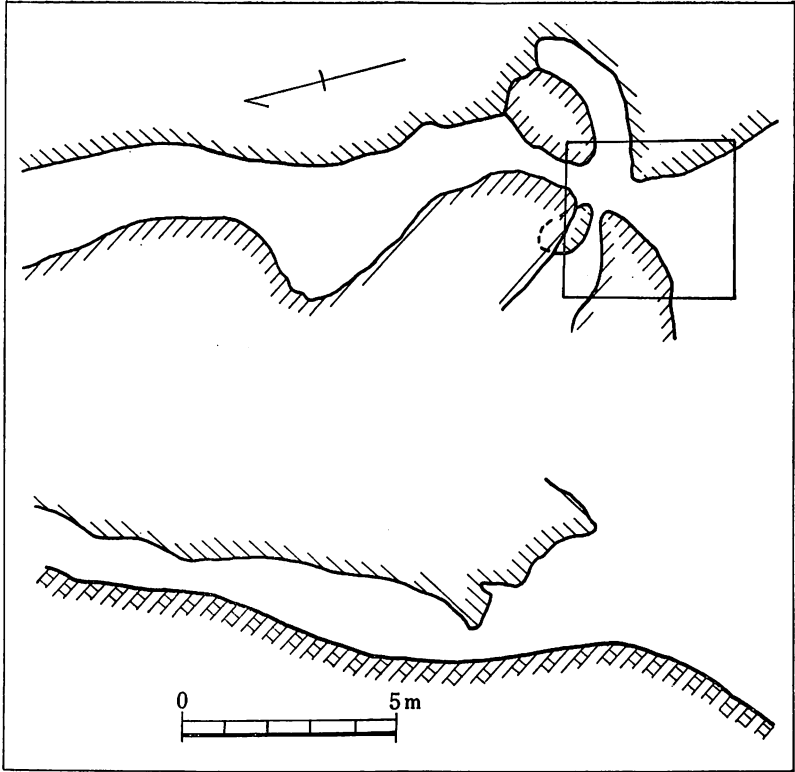
土層の厚さと層位を知るために、主要窟南側入口前面の南端と、西側入口の現存する先端部分の地層断面を観察したところ、つぎのような結果が出た。西側入口の地層断面は、上から

- (一) 現在の表土で、粘土分の多い腐蝕土層 約六十センチ
- (二) 粘土層 四五センチ
- (三) 腐蝕土層 約五〇センチ
- (四) 粘土層 四五センチ
- (五) 腐蝕土層 六五センチ(この層のところどころに石混じりの層(二三センチ)と灰層(二〇センチ)が挟まる。)

南側入口の地層断面

- (一) 粘土分の多い腐蝕土層 約八〇センチ
- (二) 粘土層 五〇センチ
- (三) 腐蝕土層 四五センチ
- (四) 粘土層 二〇センチ
- (五) 腐蝕土層 五〇センチ(この層には火に焼けた土および灰層(三〇センチ)が挟まる。)
- (六) 粘土層 一五センチ
- (七) 腐蝕土層 一五センチ

このように、南側入口の断面の地層の状況は、若干複雑である。しかし、後述するように、発掘を通じて明らかにしたところによれば、現在の南側入口前面の南端の地層断面は、洞窟の南側部分の傾斜面を切断したもので、純粹



第2図 洞窟の平面と断面

の断面ではなかった。すなわち、洞窟の内側の地層状況は、この南端のそれと同一ではなかったが、それを通してみると、南側「断面」に現われた最初の文化層(三)と、粘土層を介在して、二番目の文化層(四)は同じものであったという。

つぎに、遺物の出土状況について、便宜上、南側入口の外部から洞窟内部に向かって発掘された順序にしたがってみてみよう(第三図)。

まず、厚い腐蝕土層(一)とその下にある粘土層(二)まで、すなわち、表土からおよそ一・三メートル(南側が分厚い)の深さまでには、近現代の磁器片や、犬骨・野生猫骨など小動物骨が混じっているだけで、他には何の遺物もみいだせなかった。

〔上層〕その下に堆積した黒色の



第3図 遺物出土状況

腐蝕土層(三)は、原始時代遺物を含んだ文化層である。この層からは遺物と遺骨が少なからず出土した。復元が可能で形態のわかる土器をはじめとして、美松里遺跡発見遺物の大多数がこの層から検出された。数多くの遺物と遺骨が、発掘範囲の全面にわたって無秩序に散布していた。その出土状況に関して特記すべきことは、発掘範囲内の北端つまり洞窟内側における状況であった。そこでは、数多くの土器・石鏃・紡錘車・骨針などの遺物と人骨が混じって出土したが、それらはすべて正常な出土状態を示していなかった。人骨は無秩序に堆積していて、あるものは土器と混じり、また、あるものは上から転がり落ちたような直径三〇〜四〇センチの石に押しつぶされていた。洞窟の隅には頭蓋骨があったが、その下に大腿骨と思われるものがあったり、頭蓋骨そのものにも石が入りこんだりしていた。その周囲からは歯が発見されたが、それも散乱しており、人骨と思われる骨とは隔たっていた。そのような遺物と人骨の出土状況は、洞窟の天井などの崩落によって攪乱された結果と思われる。事実、文化層のなかには長さ一メートルをこえる石も含まれていた。

いっぽう、露天状態にある洞窟の外部は事情が少し異なっていた。洞窟の内側に近いところでは、遺物が石と混じり合っていたが、そのほかのところでは、遺物は、深さを異にすることはあっても、比較的整然としていた。ここでも、人骨が出土し、二個体分を確認した。そのうち、東壁の縁で出土した人骨の北側に柱状石斧と青銅斧があり、さらにその北側にも復元可能な土器五個体分が散布していた。もう一つの人骨は、西壁縁にあったが、頭蓋骨だけが残存した。頭蓋骨のすぐ横に土器一個体分と石製紡錘車が一個出土した。また、西壁の下からは石鏃九個が一カ所に埋まっていた。そのうちの一個は有茎であるが、残りは無茎のものであった。そして、その付近には、土器の破片や獣の顎骨、貝殻などが散布していた。このように、この文化層からは比較的狭い発掘面積にもかかわらず、多数の遺物や遺骨が出土したが、その出土状況からは一定の秩序をみいださなかった。また、施設物と考えられるものは何も発見できなかった。ただ、ときどき炭屑と灰は認められたが、火をおこすための施設物はなかった。

さて、そのような文化層の発掘を通じて、明らかにしたことは底面が南側にだけ傾斜したものではないという点である。現状の洞窟内部で遺物が多く出た付近では、西側が高く、東側が深い。また、入口の外部で現在露天状態になっているところでは、逆に東側が高く、西側が深い。そして、南側で人骨が出土した地点の付近では、底面が一段と急傾斜になり、あたかも崖のようになっていた。このことは、つぎに述べるように、その文化層の下の地層のところで、洞窟の外部の南端の地層と、洞窟内部の地層との間に差異をもたらす原因となったのである。すなわち、右に述べた最初の文化層の下にある粘土層(四)は、無遺物の間層として、洞窟内部から外方へと続いてくる。ところが、洞窟の外部の南端の地層断面でみると、その下に厚い文化層(三)があり、さらにその下位に粘土層(四)、文化層(五)の順序でいくつかの層位が認められた。しかし、そのことは、南側で人骨が出土した地点の付近の底面が急傾斜であったところだけでみられた現象であって、その北側では、そのような地層関係は認められず、粘土層(四)の下に単一の文化層(五)があっただけである。ところで、注意しなければならないのは、洞窟外部の南端付近では、第一番目の文化層(三)と、粘土層を介在した第二番目の文化層(五)からそれぞれ出土した遺物の総数は、同一であるという事実である。もう一つの粘土層(六)を間において発見された東壁際の人骨のすぐ東南側では、第一番目の文化層から出たものと同種の土器破片が出土した。そして、また西壁際の頭蓋骨の南側でも、第一番目の文化層から出たものと類似した無茎の石鏃が出土した。とくに、土器破片のうちの一つは、コマ形土器を連想させるものであったが、それは洞窟の内側で検出された頭蓋骨の脇で出た破片と一個体のものであった。このような事実は、もともと傾斜面に堆積した一つの文化層であったものが、洞窟外部の南端付近では急傾斜のため、北側から文化層が流れこんだり、文化層の一部が切られたりして攪乱状態を生じたという事情を物語るものである。

〔下層〕さて、厚さ五〇センチの無遺物の粘土層(四)の下には、もう一つの文化層(五)があるが、厚さ一五〇センチの薄いものであった。この層を下層とするが、遺物はきわめて少なかった。洞窟の内外から土器破片と骨片お

よび若干の石器が出ただけである。石器には、洞窟内部と発掘範囲の南端でそれぞれ一個ずつ石錘、やはり南端で石鏃片と思われるものが一個、さらに、その脇で碧玉系統の玉石製の装飾品一個と骨錐が出土したにすぎない。

西側入口付近の地層関係ならびに発掘状況も南側入口の場合と類似していた。ただし、発掘範囲が四平方メートルと小さかったため、遺物は上層でもきわめて少なかった。ここでは、復元可能な土器一個と、そのそばで碧玉製管玉一個のほか、土器片や骨が出土した。また、火をおこしたことを示す炭や灰は検出したが、炉のような施設物は何もみられなかった。下層は、粘土層(四)の下の厚さ六五センチの腐蝕土層(五)のなかに認められる。この層には、石混じりの層が介在するが、その層の上位で厚さ二〇センチほどの腐蝕土層が下層にあたる。下層ではいっそう遺物は少なく、土器片を一点検出したにとどまる。

調査報告によると、美松里洞窟では以上のような層位関係と遺物の出土状況が考えられた。総合すると、美松里洞窟では、下層に櫛目文土器文化と上層に無文土器文化が存在したことになる。ここではこの論文の主題からいって、上層の無文土器文化層に限定して問題としたい。上層の層位および遺物の出土状況は、右に述べたように、洞窟内天井部からの岩石の崩落と土砂の流入、かてて加えて洞窟外方南端付近における地層の転移などの理由から、攪乱状態にあった。したがって、まず第一に取り上げたいのは、上層における一一体分以上の^④人骨をめぐって、ここを墓地とする規定だけでよいかどうかという遺跡の性格の問題である。というのは、各種の獣骨や土器・石器・青銅器など豊富な遺骨と遺物が検出されており、そのなかには墳墓の副葬品としてよりも、日常生活と係わりの深いものが多くあって、住居地としての可能性もまったく無視できないのである。人骨や各種の遺物が小範囲から比較的多量に出土したことを考えると、墳墓と住居が時期を異にして存在したのではないかと思う。第二に問題としたいのは、そのこととも関連するが、上層が二時期にわたり、無文土器の細分が可能ではないかという点である。無文土器の型式細分に

関しては、右に述べたような層位関係から、層位別による細分は不可能であるため、いきおい純粹の型式分類に依拠せざるをえないのである。第一の問題については、墳墓かそれとも住居跡のいずれかを論断することができない状況にあるため、それ以上の議論は差しひかえたい。ここでは、第二の問題を取り上げ、次節で無文土器を検討してみることとする。

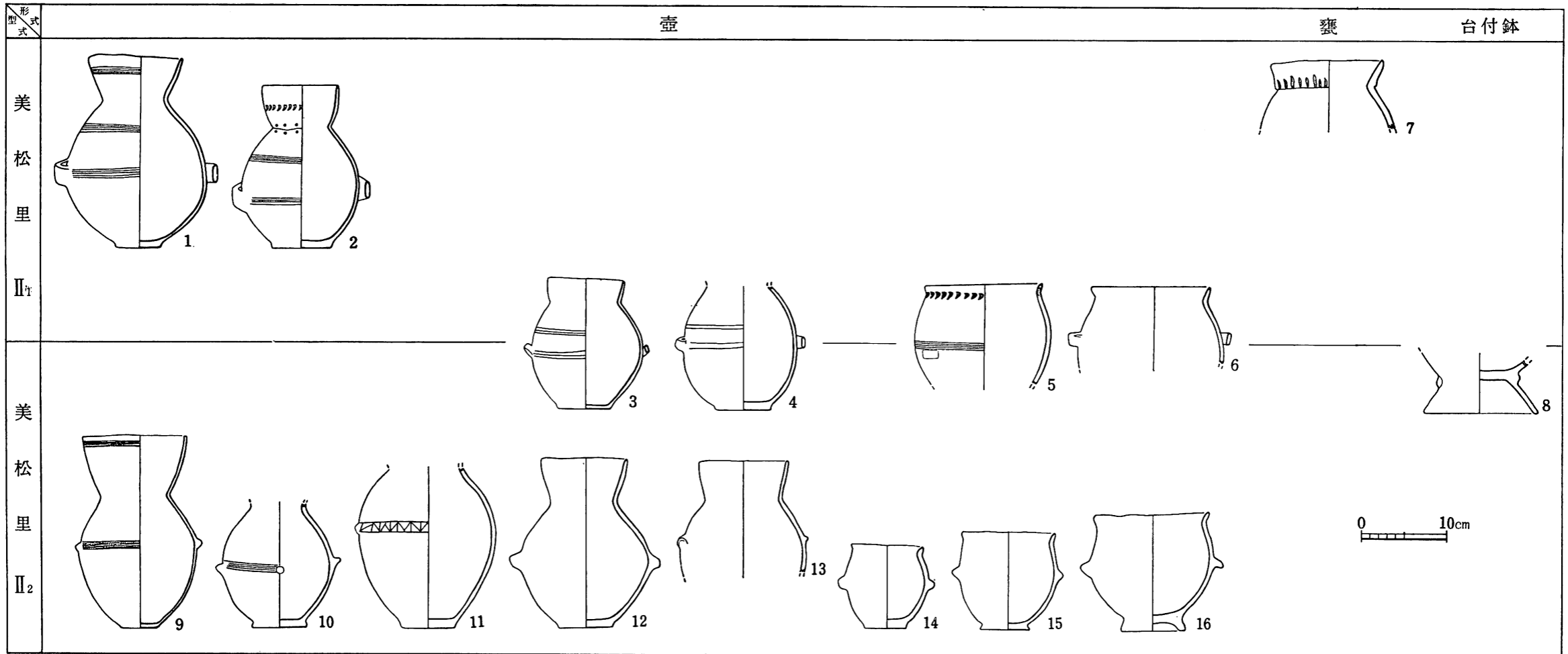
五、美松里洞窟検出無文土器の検討

まずもって、美松里洞窟の上層つまり無文土器文化層を美松里Ⅰ、下層すなわち櫛目文土器文化層を美松里Ⅱと仮称して話を進めたい。ただし、ここでは美松里Ⅱと仮称した無文土器の型式細分を論題とする。美松里Ⅱに属する無文土器は、完全なものと復元が可能なものだけでも一二個あり、復元ができなくても土器の形態や特長のわかるものが五個あって、良好な資料といえる。無文土器は二重口縁の甕を除くと、すべて表面を磨研している点に共通した特色がみられる。しかし、土器の大小を除いて、細部をみると、器形・把手形態そして文様においては差異が認められる。いっぽう、平安北道寧辺郡細竹里遺跡では、美松里型土器^⑥が、上・下の二層の住居跡から出土している。そして、下層の住居跡から出た美松里型土器の壺には、細い線の線条帯文を描いたものがある。上層の住居跡から出た美松里型土器の壺にはデグザグ文様を描いたものがあり、また、下層にはみられなかった灰色土器を伴っている。上層出土美松里型土器の壺と同じようなものが、やはり灰色土器と共伴して、細竹里に近い位置にある平安南道价川郡墨房里遺跡^⑦第二四号支石墓でも出土している。このようにみると、美松里Ⅱの無文土器自体に型的に細分が可能であるとともに、同様の美松里型土器を共伴する清川江流域の無文土器の型式編年における上・下すなわち細竹里Ⅰ_a・細竹里Ⅰ_bという二型式の存在^⑧からみても、美松里Ⅰが二分されることが首肯されよう。こうした観点に立脚して、美松里Ⅱを新・古の二型式に細分するが、前者を美松里Ⅰ₂、後者を美松里Ⅰ₁と仮称する。

美松里Ⅰには、器形として壺・甕が知られるが、他の器種は不明である。

壺には、広口の有頸壺と無頸壺がある。広口の有頸壺の器形には特色があつて、とくに美松里型と呼ばれる。器形は、全体的にみるとひょうたんの上・下を切り捨てたような形をなすが、広い口縁から頸がしだいに狭まつてくびれ、そこを境に胴へとうつる。胴はしだいにふくらむが、下半部で最大径となつて底部へと細まつていく。第四図1は、もっとも典型的なものである。器高二三・五センチ、頸の長さ六センチ内外、胴の最大径七・五センチ、そして、底径六センチを測る。表面を磨研している。色調は灰色であるが、若干褐色気味であつて、とくに頸と口縁は褐色が強い。胴部最大径の部分に、一对の帯状把手が横につく。五本からなる線条帯文が、頸部に一条、胴部上半に一条と、一对の把手間を結んで一条の合計三条めぐる。線条帯文は、施文具が強く押されなかつたため、線条のはつきりしない部分がある。また、線条がまっすぐでなく、若干曲りくねっているが、もちろん意識的にそうしたものではない。この型式の土器は、完全に復元できたもの三個と頸を欠失したものの一個がある。完形の復元土器には、さらに大きく器高が二六センチ、胴部最大径が一八・五センチのものもある。

第四図2は、1に比べて頸部が少し内湾気味であり、いくらか小さく、また、頸部の文様が異なる。器高一九・七センチ、胴部最大径一三・七センチ、底径七・六センチを測るが、底径が胴に比して他の土器より大きく安定感がある。頸部ほぼ中央には、串のような施文具を使ってコンマ形の短線を横列にめぐらす。また、胴部上半と、胴部最大径付近にある一对の帯状把手を結んで各一条の線条帯文をめぐらす。くびれ部に上・下に対をなす有孔列点がみられるが、修理痕と思われる。器表面は磨研している。この土器とほとんど同じ大きさであるが、頸部を欠失したものである（第四図4）。現存器高一四・五センチ、胴部最大径一三・五センチ、底径六・五センチの大きさである。黒色を帯びた部分が多い褐色を呈し、磨研する。頸部の文様は不明であるが、胴部の上半と中央に二本で構成される線条帯文をめぐらす。胴部最大径が胴部のほぼ中央にくる。そこには一对の帯状把手を横につける。この土器より少し小



第4図 美松里洞窟出土の無文土器(縮尺 $\frac{1}{6}$)

さいもの（第四図3）は、器高一六センチ、胴径一三センチ内外、底径五・五センチ内外である。赤味を帯びた褐色を呈し、磨研する。頸部には文様がないが、胴部の上半と中央に、三齒の施文具を使って引いた線条帯文がそれぞれ一条ずつめぐる。胴部最大径が胴部の中央にくる。第四図1・2との差異点は、頸部が四センチと若干短かく、そこに文様を描出しないこと、そして、把手の形態が異なることである。1・2では、横からみると正方形に近い幅広の帯状の把手が横につくが、4の把手は幅が狭いうえに、下縁を長く、上縁を短かくして上向きにつけられている点に特色がある。第四図3・4の二つの土器については、頸部が短かく、帯状把手をもつ点では、1・2と近いが、両者ともに、胴部最大径が胴部中央にある点では、後述の9・10に近い。帯状把手についても、上向きのもので、一步進めば後述の口唇状把手になろう。したがって、3と4は、過渡の様相をみせるので、厳密には細竹里Ⅱには含まれないが、一応、仮りにここで論じた。

壺のもう一つの形態として、広口であるが、無頸の壺がある。第四図5は、底部を欠失しているが、現存する器高は一四センチ、口縁径一四センチ内外、胴径一六センチを測る。赤味を帯びた褐色を呈すが、一部に黒色を帯びたところもある。口縁部はいったん大きく狭まってから、口縁端部でゆるく外反する。把手はそれが一対ついていた痕跡しか残っていないので、帯状か口唇形かどちらともわからない。把手は、一方は口縁下七センチ、他方は口縁下五・五センチのところについていたようである。二つの把手の間を結んで線条帯文が走る。口縁のすぐ下に、串のような施文具でノの字のような文様数本ずつを横に列ねた文様帯がみられる。器表面に文様はないが、同じような形態の土器（第四図6）がある。これには幅は一・四センチと狭いが帯状の把手が、口縁から五・七センチ下で、胴部中央より少し上がったところに横についている。ともに表面を磨研している。

甕は、いずれも破片で、数個検出されたが、これだけは磨研していない。口縁部に特長があって、折り重ねて二重にしたもので、そこに刻み目を入れる。口縁部の破片が三個体分検出されただけであるが、いわゆるコマ形土器に属

するものである（第四図7）。

台付鉢（第四図8）は、美松里I₁とは断定できないが、便宜的にここで取り扱っておく。現在、鉢部がほとんど欠失して、台脚部しか残存していない。台脚部の高さ三・二センチ、底径一三センチ、鉢部と台脚部の境のくびれ部の直径が一〇センチの大きさである。赤味がかった褐色を呈する。鉢部と台脚部の境のくびれ部には、瘤状の突起が四個ついていることは珍しい。表面は磨研している。

つぎに、美松里I₂をみよう。美松里I₂の器形には、各種の壺しか知られていない。第四図9は、広口の有頸壺である。器高二三センチ、胴部最大径一三・七センチ、底径四・五センチを測る。把手の位置を境として、左右の半分は黒色、他の半分は灰色を帯びている。保存状態がひじょうに良好で、表面はよく磨研されている。I₁型式の広口有頸壺（第四図1）に比して、口縁径が一二センチ内外と広く、また、頸部も七センチと長いが、底は小さい。底部は胴部からしだいに移行し、両者の境は明確でないが、一応は平底である。胴部の最大径がほぼ中央部にくることも特色で、そこに一对の把手をつける。把手は、乳首形でも口唇形でもなく、少し長目に盛り上ったような突起状をなす。

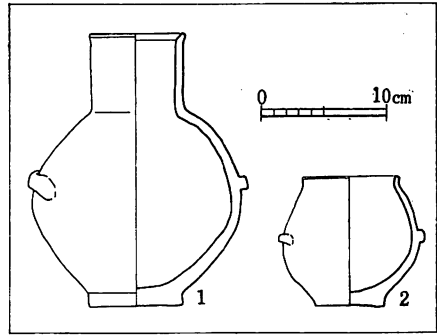
この把手の間を連結するように、八本からなる線条帯文をめぐらす。頸部にも口縁近くで線条帯文がみられるが、ところどころ若干曲りくねっている。同じ型式の土器として第四図10がある。頸部は欠失しているが、現存する胴の高さは一五センチ、胴部最大径一三センチ、底径五・五センチを測り、黒色を帯びた褐色を呈し、磨研する。胴部は中央には、乳首形把手と口唇形把手が一對ずつ合計四つつくことが特色となっている。把手間を結んで五本からなる線条帯文がめぐる。第四図11も胴部の形態からみて同種のもので推測される。頸部は欠失しているが、胴部は完存する。胴部は中央に一对の把手がついていたが、現在ではその痕跡を残すだけである。把手間を結んで文様帯が走る。上下に二本の線を引き、その間に縦線をもって長方形の区画をつくり、さらにその長方形区画内に対角線を引いたものである。

同じ有頸壺でも、器表に文様のまったくないものがある（第四図12・13）。12はもっとも典型的なもので、器高一九・五センチ、胴部最大径一六センチ、底径六・五センチ、そして、頸の長さ四・五センチを測る。胴部中央に一对の切株形把手がつく。13は、頸の幅が広いので、12よりはおそらくいくらか大きいであろう。口縁径一〇センチ、頸の長さ四・五センチの大きさである。いずれも表面を磨研している。

壺類にはまた無頸壺がある。第四図14は、口縁が少しくの字形に外反するが、胴部はゆるやかなカーブを描く。小さい底部は胴部と明確に区別される。器高一・五センチ、口縁径一一センチ、底径五・五センチを測る。黒色を帯びた褐色を呈する。口縁から四センチ下がったところに、乳首形の把手が一对つく。14よりは若干小さい15は、器高一〇センチ、口径九センチ、底径五・三センチを測る。やはり口縁下四センチのところに、切株形の把手がつく。16は、14・15より大きく、器高一四センチ、口縁径一三・五センチ、底径七・五センチを測る。口縁下五・五センチのところに厚い口唇形の把手がつくことと、底部が上げ底になっている点に特色がある。いずれも表面は磨研される。この種の土器で、器高一二・三センチ、口縁径一二センチ、底径七センチの大きさのものでは、把手は痕跡しか残っていないが、底面に木の葉の文様をもっている。

六、おわりに

これまで述べてきたように、美松里洞窟出土の無文土器を型式的に細分し、美松里Ⅰと美松里Ⅱとした。両者の差異は、広口の有頸壺にもっとも端的に表われている。すなわち、美松里Ⅰの壺は、相対的にいって、頸部が短かく、胴部はその最大径を下半部にもつのに対して、美松里Ⅱでは、頸部が大きく、胴部最大径がほぼ中央部にくることがあげられる。把手についても、前者には横方向に帯状把手をつけるが、後者では乳首形あるいは口唇形などとなっている。もっとも、両者ともに基本的に、ひょうたんの上下を切り捨てたような特長的な形態に把手を有し、いずれも

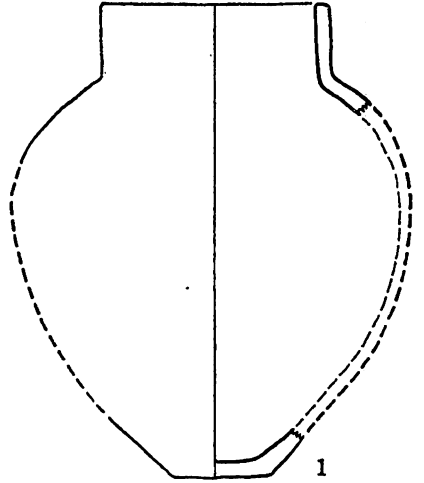
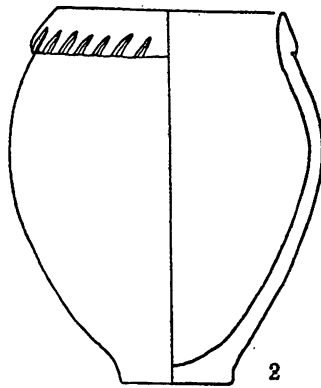
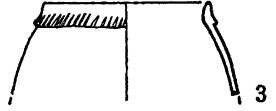
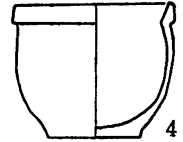
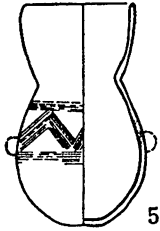
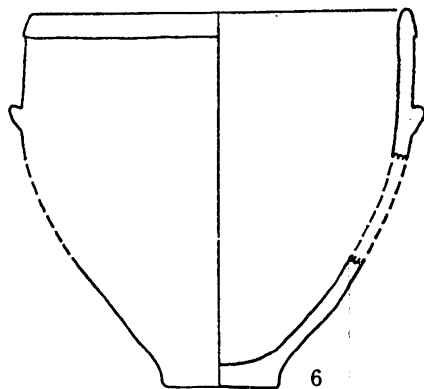
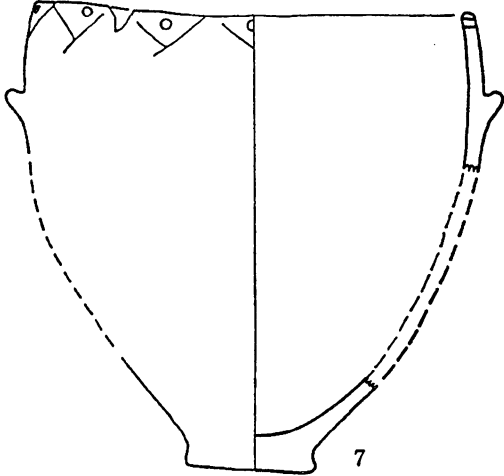
第5図 豊産里出土無文土器（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

磨研していて、細分した二型式は比較的接近した連続性の強いものである。美松里Ⅰ様式を構成する器種として、他に鉢や高杯などの存在が予想される。また、同じ壺にしても細頸壺や、甕においてもコマ形土器以外のものも存在も予測される。たとえば、美松里から鴨緑江を遡ることおよそ一七〇キロのところの位置する、慈江道時中郡豊竜里の石棺墓出土の無文土器（第五図）には、無頸壺と共伴した有頸壺に細頸のもの（第五図1）がある。頸部が直立し、胴部が若干下ぶくらみである点で美松里Ⅰに対応できる。美松里Ⅰは、後述の美松里Ⅱとの関連から、清川江流域の細竹里Ⅰ型式（第六図）に相応する。

美松里Ⅱ型式では、壺の形式はバラエティに富むが、甕が不明である。その他、鉢や高杯などについても形式が明らかにされねばならない。美松里Ⅱの他、鉢や高杯などについても形式が明らかにされねばならない。美松里Ⅱの形式において、美松里ではコマ形土器がみられない。しかし、細竹里Ⅲには、二重口縁に刻み目を入れたものがある。美松里Ⅱ型式の存在は予想される。美松里Ⅱ型式にみられる広口の有頸壺は、清川江流域において墨房里遺跡第二四号支石墓でも出土している。そして、その型式の有頸壺は、細竹里Ⅲ型式にもある。で、結局のところ、美松里Ⅱ型式は、細竹里Ⅲ型式と対応関係におくことができるのである。

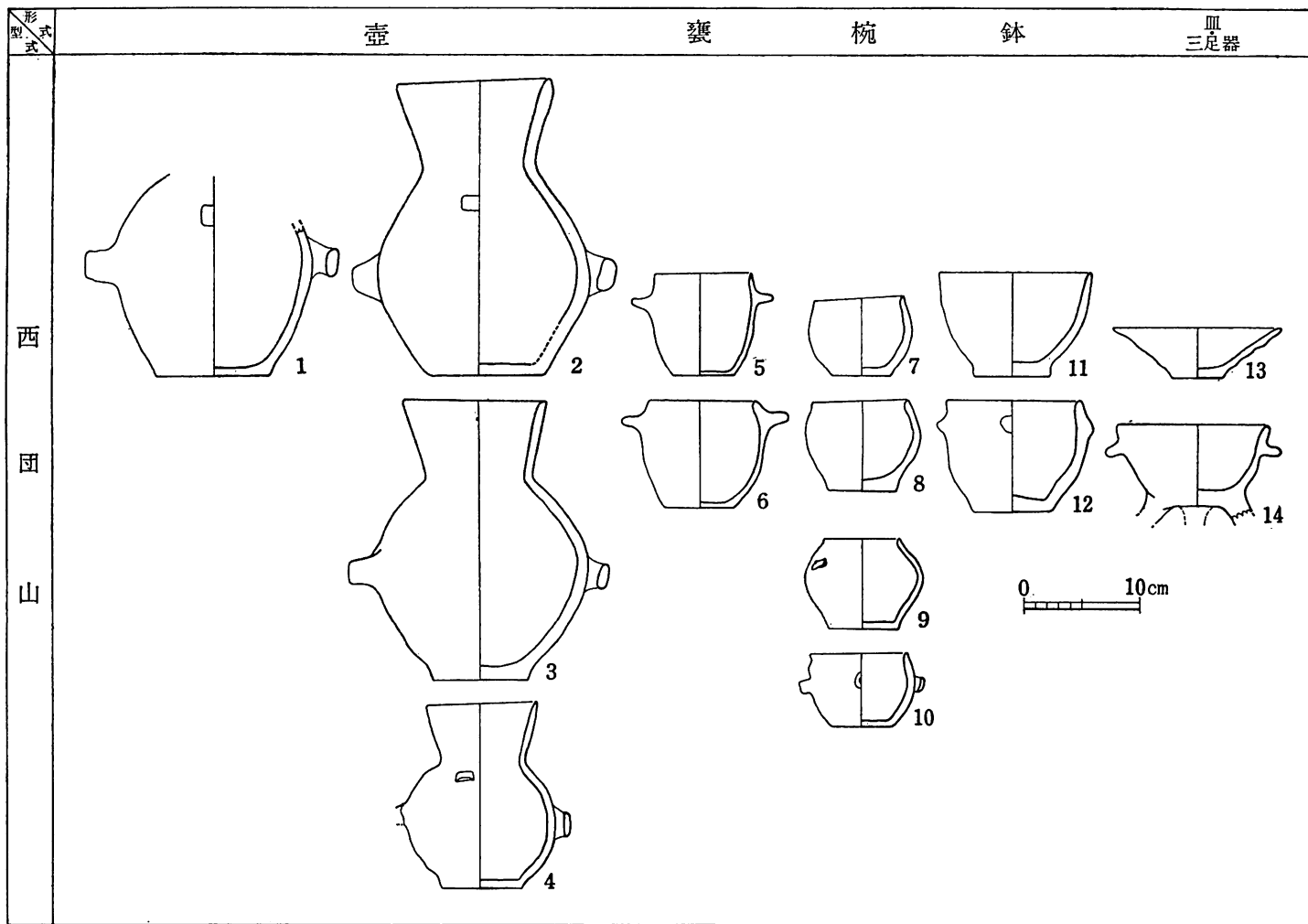
美松里Ⅰ型式のコマ形土器の甕は、朝鮮半島においては、細竹里Ⅱ型式を介在して、大同江流域において盛行をみるコマ形土器へと展開していく。いっぽう、中国大陸では遼寧省旅大市旅順口区尹家村第一号石室墓や同尹家村第一二号石墓^⑧でコマ形土器が出土している。

すでに繰り返しかえし述べたように、美松里洞窟出土の広口の有頸壺は、ひょうたんの上下を切り捨てたような独特の

形式 型式	壺	甕	深鉢
細 竹 里 Ⅱ ₁	 <p>1</p>	 <p>2</p>	
細 竹 里 Ⅱ ₂		 <p>3</p>	 <p>4</p>
細 竹 里 Ⅱ ₃	 <p>5</p>	 <p>6</p>	 <p>7</p>

0 10 20cm

第6図 清川江流域の無文土器(縮尺 $\frac{1}{6}$)



第7圖 西團山出土土器(縮尺 $\frac{1}{6}$)

形態を示し、「美松里型」とも呼ばれる。この型式の壺は、朝鮮半島では、鴨綠江下流域の平安北道竜川郡新岩里、清川江流域の細竹里のほかに、鴨綠江上流域の慈江道中江郡長城里および土城里や大同江流域のピョンヤン市勝湖区域金灘里などで出土し、広範な地域との親縁関係を示す。さらに、中国大陸では、松花江流域の吉林省西团山石棺墓群（第七区）、遼河流域の遼寧省撫順市大夥房石棺墓などで出土している。無頸壺については、豊竜里をはじめ慈江道江界市公貴里遺跡でも出土し、鴨綠江上流域との関係も深かったことがわかる。

最後に、美松里洞窟出土の銅斧と土器型式との相関関係にふれて結びとしたい。美松里Ⅰに属するとした豊竜里では銅釘が出土している。この種の銅釘は広く分布するが、豊竜里の近くでは吉林省騷達溝山咀子第一号石棺墓で知られる。そこでは銅斧も相伴している。豊竜里と騷達溝・山咀子との間にみられる共通した墳墓構造（石棺墓）と副葬品（銅釘）をはじめとする吉林省と慈江道との文化的関係からみると、豊竜里と同型式の美松里Ⅰの段階に、騷達溝でみられる銅斧に対応させて、美松里出土の銅斧を位置づけてもかまわない。しかしいっぽう、美松里出土の銅斧は、遼寧省地方で遼寧式銅剣とともに発見される銅斧とも共通性がみられ、同地方と美松里の土器型式の対応関係が明らかになれば、この方面からの美松里出土銅斧の帰属問題も解明されよう。したがって、美松里出土の銅斧を一応、美松里Ⅰの段階に考えたが、美松里Ⅱにまったく該当しないというわけでもない。また、美松里出土の銅斧には二個がある。一つは、遼寧式銅剣Ⅰ式に伴う銅斧Ⅰ式に近いが、もう一つは遼寧式銅剣Ⅱ式に伴うⅡ式の銅斧と共通点がある。このように型式が若干異なっているので、その型式差を時期差と考えて、美松里Ⅰと美松里Ⅱの両様式にまたがるとする考え方も捨てきれないのである。

【註】

(1) 浜田青陵、一九二二『通論考古学』

(2) 西谷正、一九七五「会寧五洞の土器をめぐる問題―北部朝鮮無文土器編年のために―」『史淵』第一二二輯、二八一～三〇

八頁。西谷正、一九七七「細竹里の土器をめぐる問題―西部朝鮮無文土器編年のために―」『考古論集（慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集）』四七三～四九四頁。

- (3) 美松里洞窟遺跡については、最初、金用珩、一九六一「美松里洞窟遺跡発掘中間報告(1) (2)」『文化遺産』一九六一年第一号・第二号で中間報告が行われたが、後に、若干の修正を加えて、金用珩、一九六三「美松里洞窟遺跡発掘報告」(『各地遺跡整理報告』) 『考古学資料集』第三集が公刊された。ここでは後者をテキストとして使用した。

なお、美松里洞窟遺跡の重要性は、金用珩、一九六三「美松里遺蹟の考古学上の位置―年代論を中心として―」『朝鮮学報』第二六輯（李進熙訳、一九六四『考古学雑誌』第五〇巻第一号）によって、いち早く日本に紹介された。

- (4) 金用珩、一九六三「前掲論文」二〇七頁。

- (5) 金用珩、一九六一「前掲論文(2)」二六～二九頁では、墳墓としたが、金用珩、一九六三「前掲論文」二一〇頁では、住居跡の可能性も認めているようである。

- (6) 『考古民俗』一九六七年第二号四一頁で、「美松里型壺」について解説している。それによると、美松里洞窟遺跡上層（青銅器時代末期の古朝鮮層）の土器を指標とする。底部が平底で、胴部が丸く、そして、長い頸部が上に上がるにつれて広くなる。そのため、器形は、上・下を切り捨てたひょうたん、あるいは、チョロンバク（ひょうたんで作った水汲み器）のような独特の形態をもっている。いずれも二〇センチ内外のやや短い壺であるが、胎土には雲母を混じえ、表面をつややかに磨研する。色調は、褐色もしくは灰褐色である。ところで、土器の外形、色調および大きさは共通するが、土器のなかには、文様があるものとなないものがある。また、環状（帯状）把手、切株形把手をはじめとする各種の把手があるものともないものがある。文様として頸部と胴部に数本の細線からなる線条帯文を横方向に若干曲りくねってめぐらすこと、上口唇形の把手をもった土器もやはり特長的なものである。したがって、そのような口唇形把手と線条帯文をめぐらした、ひょうたん形のやや小形の土器を典型的な「美松里型」の壺ということができると、文様がまったくなく環状（帯状）把手のみ四個細線からなる二条の線条帯の間に、同様の線条帯をW字形に配するものと、文様がまったくなく環状（帯状）把手のみ四個ずつとりつけたものなど変型のものがある。

- (7) 李炳善、一九六七「鴨綠江流域における鉄器時代の開始」『考古民俗』一九六七年第一号、一四頁。

- (8) 西谷正、一九七七「前掲論文」四八八～四九一頁。

- (9) 有光教一、一九四一「平安南道江界郡漁雷面発見の一箱式石棺と其副葬品」『考古学雑誌』第三二巻第三号。

- (10) 西谷正、一九七七「前掲論文」四九〇頁。
- (11) 西谷正、一九七七「前掲論文」四九〇～四九一頁。
- (12) 原田淑人、一九三一「牧羊城―南滿州老鉄山麓漢及漢以前遺蹟―」『東方考古叢刊』第二冊、四四～四五頁。
- (13) 金用珩・黄基徳(永島暉臣愼・西谷正訳)、一九六八「紀元前一〇〇〇年紀前半期の古朝鮮文化」『古代学』第一四卷第三・四号、二四七～二四八頁。
- (14) 李順鎮、一九六五「新岩里遺跡発掘中間報告」『考古民俗』一九六五年第三号、四六～四七頁。
- (15) 金鍾赫、一九六一「中江郡長城里遺跡調査報告」『文化遺産』一九六一年第六号。
- (16) 李炳善、一九六一「中江郡土城里原始及古代遺跡発掘中間報告」『文化遺産』一九六一年第五号。
- (17) 金用珩、一九六四『金灘里原始遺跡発掘報告』『遺跡発掘報告』第一〇集。
- (18) 吉林大学歴史系、一九六〇「吉林西团山石棺墓発掘記」『考古』一九六〇年第四期、三五～三七頁。東北考古発掘団、一九六四「吉林西团山石棺墓発掘報告」『考古学報』一九六四年第一期。
- (19) 孫守道・徐秉琨、一九六四「遼寧寺幾堡等地青銅短劍与大夥房石棺墓」『考古』一九六四年第一期。
- (20) 考古学及民俗学研究所、一九五九「江界市公貴里原始遺跡発掘報告」『遺跡発掘報告』第六集。
- (21) 佟柱臣、一九五五「吉林的新石器時代文化」『考古通訊』一九五五年第二期、八頁。
- (22) 秋山進午、一九六八「中國東北地方の初期金属器文化の様相(中)」『考古学雑誌』第五四卷第一号、四頁。
- 【追記】 本稿脱稿後、新着の『考古』一九七七年第五期の、遼陽市文物管理所「遼陽二道河子石棺墓」に触目の機会を得た。遼陽市二道河子村で発見された二〇余基からなる石室墓群のうち、第一号・第二号墓が調査報告されている。第二号石室墓から、美松里Ⅱ型式の壺が出土している。なお、第一号石室墓からは、遼寧式銅劍・銅斧・銅のみ・斧―鍔鏃範・土器(壺・台付鉢)が伴出している。